

承認2号議案 2022年度の事業計画案

大宅壮一文庫のNext50は、事業収益の改善、図書館の電子送信やポストコロナへの対応など、難題山積となっている。22年度はこれらの課題に向けて、「利便性の向上」「索引データの有効活用」「支援の輪拡大」を3本の柱として据え、新たな試みに取り組んで行く。

<利便性の向上>

▼当日発送が必要な記事複写のFAX受付終了時間を延長する。現在の午後5時から午後6時30分までの1時間30分延長を検討。利用者アンケートでも希望が多く、利用拡大が期待できる。

23年度からは「図書館の電子データ公衆送信」がスタートする。運用の詳細が不明だが、経費の膨張や職員増員などが必要などと負担が大きく、文庫が実施するのは難しそうな状況。実施見送りの場合、締切り延長サービスは、対抗策にもなる。

▼ホームページのトップページデザインを見直し、一部改良する。

具体的には、メニュー部分とスライドショー整理などをして、利用者が見たいページをすぐに見つけられるようにする。

ホームページは、10年前に開設して以来ほとんど改修が行われず、「ページが見辛い」「どこに書いてあるのかわからない」などの声が出ていた。

<索引データの有効活用>

▼データベースの管理システムを、23年度に切り替える際、パソコン用画面のほか、新たにスマートフォンやタブレット用の画面表示ができるようにし、気軽に索引検索ができる仕様を検討している。

また別建てとなっている88年以前の“目録”データ100万件を88年以降データ(約700万件)と合体させて一本化を図り、索引データの充実を図る。

今回のデータベースは、クラウドサービスを利用する。クラウドの利点は、ハードウェアのサポート期限切れなどで実施する5年に1度のシステム開発が必要なくなり、長期利用ができること。さらにハードウェアの障害対策、災害対策などはクラウド側が実施するため対応不要などの利点も多い。22年度は要件定義の提出をする。

▼Web OYA-bunko 教育版、図書館版の導入促進を図る。教育版については、導入学校の学生にコピー料金割引の新しいサービスを提供する。また図書館版については、国会図書館の電子データ送信を利用する際の“必需品”を強調して、地方の公立図書館にアピールしていく。

▼Web 会員版での外部からの検索は、賛助会員に限定されている。これを会員以外の一般にも開放。初めの10件までは無料で、その先は有料などとなる課金システムの開発や、画面にネット広告の挿入も検討する。

<支援の輪拡大>

▼支援組織「パトロネージュ」を通しての支援は、財政面の大きな力となっている。22年度は、参加が少ない企業会員の開発に全力を注いでいく。

▼亡くなられた方からの支援である「遺贈」についても、大宅文庫を選択してもらえるように、パンフレットなどで訴えていく。また遺贈寄付の推進を図っている「全国レガシーギフト協会」(21年度にレガシーパートナー加盟)での情報交換に努める。文庫には、これまでに2件の遺贈の意思表示が寄せられている。

<その他>

▼文庫の無料開放＝大宅壮一の命日(11月22日)翌日の23日(勤労感謝の日)、入館無料で特別開放する。①川端康成の弔辞公開②創刊号雑誌の展示③書庫案内などを実施する。創刊50周年の21年ゴールデンウィークに計画したが、コロナ禍のため中止になっている。

▼大学等で提携授業＝①専修大学で雑誌ジャーナリズム論講座で、学期後半の15コマを担当する。講師は出版各社の編集者や文庫職員。21年度に受託して実施し、豪華講師陣での授業に大好評だった②中央大学図書館情報学授業の一環として「Web OYA-bunko」ガイダンスを実施する予定。大宅壮一や文庫の紹介、Web を利用してのテーマ検索などのテクニックもレクチャーする③東洋美術学校との産学共同授業を実施。19年度から開催し3回目。学生が文庫の魅力発信の方法を考え、ポスターや映像作品にしてくれる。

▼世田谷区立経堂図書館との共同で、「バック トゥ・ザ昭和～昭和40年編～」を開催する。高齢者に当時の雑誌写真などを見せ、思い出を語り合ってもらおう。認知症予防である回想法療の一環として実施する。